

EurekaXIV

六年制通信 No.5 令和8年5月8日(金)号

頭の体操

もうほとんど全ての場面もセリフも覚えているのですが何度も観てしまいます。「舟を編む」という映画のことですが、そんなに好きかと自分で突っ込みを入れたくなるくらいです。NHKのドラマも面白くて何度も観ています。映画の方は三浦しをんの原作があるので活字でも楽しめますが、ドラマは書籍になっていないので残念です。本当に好きなもの嫌いなもの、退屈なもの飽きないもの、これらは人によってその種類も熱量も違うものですね。そこが面白いのでしょうか。

最近『みんなの校正教室』なる、ほとんどの人の興味を引きそうにない本を読んでいたのですが、そこで出題されていた問題を少し君たちにも紹介しましょう。まず、外国人を混乱させると言われる日本語の「数え方」。これは私たち日本人も知らない人が多いですよ。知らなくてもそんなに困らないし。以下の問題、できますかな。

映画：一本、絵画：(①)、将棋：一局、将棋盤：(②)、ざるそば：(③)、箸：(④)、刀剣：一振り(ひとふり)、イカ：(⑤)、蝶：専門的に数える時は一匹ではなく(⑥)、キャベツ：一玉(ひとたま)、花：(⑦)、箏箏：(⑧)、たらこ：一腹(ひとはら)、小説：(⑨)、数珠：一卷(ひとまき)、鐘：一口(いっこう)、事件：一件、目刺し：(⑩)。

さて、この最後のなんて、すっとわかる人の方が圧倒的に少数でしょうね。これらは最後に答えをつけておきます。

・こちらはおなじみの「ら」抜き言葉の問題です。正しいのはどれですか。

車なら5分で①来れますよ。/②来られますよ。

あと一人①乗れるよ。/②乗られるよ。

私はそんなに意識してはいませんが、基本的に「ら抜き言葉」は使っていないと思います。(…れる)は五段活用の動詞につく。(…られる)は上一段・下一段・カ変活用の動詞につく。つまり五段活用以外なら「ら」が必要になるとの文法的解説よりも、動詞を「Let's～(さあ、～しよう)」の形に変えた時、「～よう」となる場合には「ら」がなくてはならないという本書の解説の方がよくわかりますね。例をあげると、出る・食べる・見るは「出よう」「食べよう」「見よう」となるので「出られる」「食べられる」「見られる」となり、乗る・走る・帰るは「乗ろう」「走ろう」「帰ろう」となるので「乗れる」「走れる」「帰れる」でいいわけですね。

・次は「う / お」、「じ / ぢ」、「ず / づ」問題です。辞書で確認を。

「う？ / お？」 ① おっしゃるとうり ② ほおっておくのが一番

「じ？ / ぢ？」 ① まじかで見ちゃった！ ② こじんまりとした家

「ず？ / づ？」 ① 使いづらいパソコン ② カづくで押し切る

この中でも「こじんまり」を「こぢんまり」と訂正するのは難しいかな。ちなみに「土地」は「とち」で「地面」は「ぢめん」ではなく「じめん」とはこれいかに、ですね。このあたりの無茶苦茶は、昔の国語審議会の責任です。これは私も未だに納得がいきません。福田恒存などが痛烈に批判しましたが、正されることはなかったですね。

・これは私からの質問。

日本語には寿司を「お寿司」、箸を「お箸」など「お」をつけて丁寧に表現する方法があります。これらは「お」を省略しても十分通じますね。お風呂と言っても風呂と言ってもいいわけです。しかし、中には「お」をとると通じなくなる語がいくつかあります。例えば「おやつ」を「やつ」と言ってもわからないし、「おなかを壊した」を「なかを壊した」と言っても何を壊したのか見当もつきません。「おはよう」が「はよう」では朝の挨拶に聞こえない。さっき習ったことをみんなでおさらいしよう。これも「さらい」ではわからない。「おつかれさまでした」もそうですね。こういった、「お」をとることのできない語をできるだけたくさん挙げて、クラスで出し合ってごらん。

答え ①：一点 (いってん) ②：一面 (いちめん) ③：一枚 (いちまい) ④：一膳 (いちぜん) ⑤：一杯 (いっぱい) ⑥：一頭 (いっとう) ⑦：一輪 (いちりん) ⑧：一棹 (ひとさお) ⑨：一編 (いっぺん) ⑩：一連 (いちれん)

今週のおすすめ

・野坂昭如 『火垂るの墓』 (新潮文庫)

実は今まで読んでいませんでした。文庫本で30ページそこそこの短編なのに、映画の印象が強くて、原作を読む気にならなかったのです。野坂さんの文体(解説にもありますが関西弁をいかした饒舌体の文体)もどちらかと言えば苦手だったし。しかし、今回ゆっくり読んでみると、この作品にはこの文体が実にふさわしく思いました。

実際に戦後の食糧不足のせいで野坂の妹も栄養失調で亡くなります。野坂は「小説『火垂るの墓』にでてくる兄ほどに妹をかわいがってやればよかったと、今になって、その無残な骨と皮の死にざまを、くやむ気持ち強く、小説の清太に、その想いを託したのだ、ぼくはあんなにやさしくはなかった」と述べているとのこと。小説を読みながら、妹へのレクイエムのつもりで書いたであろう野坂の気持ちを想像すると、やり切れなくなります。この作品は、しかし、ほとんどの人にとって野坂の原作よりも高畑勲監督の映画「火垂るの墓」の方が印象に残っているのではないかと思います。原作を読んで映画を観ると、リアルさを踏まえながら高畑の解釈が随所に入っているのがわかります。私事で恐縮ですが、野坂は私の父と同年です。彼の生きた青春を父も過ごしたのだと思うとあの世代の、根本的に私の世代には(ということは君たちの世代も)持ち得ようのない一種独特の人生観のようなものが何となく切なく迫ってきます。

また今年の夏も、どこかでこの映画を観る機会があると思います。その前に、原作を読んでおいてください。野坂の饒舌が、かえって悲しく思えることでしょう。

BGMは 中島みゆきの 時代 でした…。